

やまだ・ようじ

1931年、大阪府出身。54年、松竹入社。61年に「二階の他人」で監督デビュー。「男はつらいよ」シリーズをはじめ、「たそがれ清兵衛」(2002年)「武士の一分」(06年)など監督作多数。12年に文化勲章を受章した。

85歳のマダムこと、すみれを偲ぶ賞千恵子、運転手の造二を木村拓哉が演じている。話を聞く造二は受けの苦役が要求されるため「スターが必要だった」と振り返る。どうしても木村に演じてほしいと「直々に手紙を書きました」と明

2023年に公開されたフランス映画「バリタクシー」をリメイクした。金がない崖っぷちのタクシー運転手が、ひよんなことからマダムを乗せる。家を引き払い、老人施設に入る彼女は、最後の日に思い出の場所を巡りたいと言いつつ出ず。その道中、彼女の波乱に満ちた過去が明かされていく、という筋立てだ。

映画監督として64年のキャリアで、積み重ねた作品は最新作「TOKYOタクシー」(公開中)で91を数える。巨匠と呼ばれることを嫌い、時代と家族を見つめ、大衆に寄り添ってきた。「今の日本映画には軽快な作品がない。僕は楽しんで帰ってほしいんだよ」。映画作りの根底に、常に観客への目線がある。

おはよう/  
出番  
です

★91作目の映画

「TOKYOタクシー」監督★

山田 洋次

## 全ての人の幸せを願う

かす。

シリアスなだけではなく。男尊女卑が当たり前の時代を生き抜いたすみれのたくましさはユーモアが重なる。喜劇に育てられ、自身も多くの喜劇を撮ってきた。だから、希望を持ってない今の時代に「そういう映画が作れなくなった」と寂しさをにじませる。「日本人は幸せか。この世界は平和か。そうじゃない方向に進みつつある」と嘆いた。

すみれの人生は壮絶だ。愛する人と別れた後に息子生まれ、後に結婚した男からDV(家庭内暴力)を受ける。暴力描写は苦手で、おとなびつくりの撮影は若いころのすみれを演じた蒼井優から「励まされながらでした」と笑った。

同時に、造二の家族の話でもある。家賃の更新、車検、学費。日々、金のやりくりに追われる彼らのような人々こそ「一番幸せになつてほしい」と願う。そんな造二たちに最後、サブライズが訪れる。「全ての人に頑張れ、という意味かな」。庶民への目線は、どこまでも優しいかった。(中日新聞)

